



**栗と北斎と花のまち 小布施でつくる
まちづくり×事業開発×越境学習の機会**

一般社団法人小布施まちイノベーション HUB



200年、外来者とともに進化してきたまち・小布施

まちづくりの歴史

江戸時代 1840年代
葛飾北斎と高井鴻山

高井鴻山がパトロンとなり、葛飾北斎が晩年を小布施で過ごし代表作を残す。
「外来の才能を地域の誇りに変える」文化の原点。



1980～90年代
市村家と宮本忠長氏
「町並み修景」事業

市村良三氏と市村次夫氏（小布施堂）が建築家の宮本忠長と協働しての「町並み修景計画」を推進。人口1.1万の町に年間100万人の観光客が訪れる。



2010年～
小布施若者会議、
HUBの設立

2012年から小布施若者会議の実施。
2016年小布施まちイノベーションHUB設立。産官学民をつなぐ中間支援組織として外部×地域のコーディネートを担う。



2024年～
長野県最年少町長
誕生

大宮透 新町長就任
(36歳・長野県内最年少)。
「信頼・挑戦・共創」を掲げ
外部連携をさらに加速



■ 今の小布施の特徴

外来者歓迎の町民気質

大学・企業との連携

移住・二拠点居住の受け皿

果樹王国・小布施の農業と、すでに動いている取り組み

扇状地の恵まれた農業環境と、農家と民間企業自身が変革を起こしている土壌

■ 農業環境

土壌・地形

千曲川が形成した扇状地。砂礫質で水はけ良好な平坦農地。深根性果樹に最適の土壌条件

気候

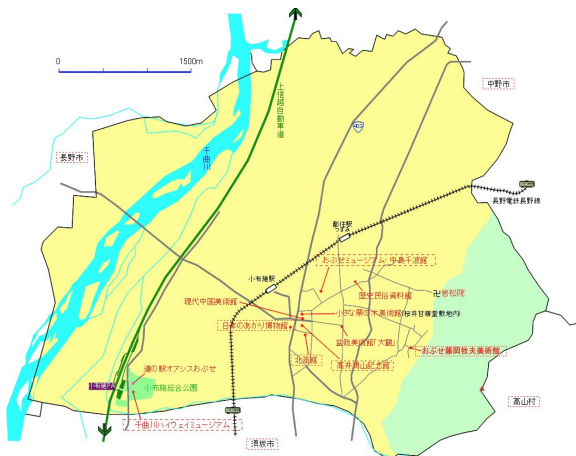
内陸性。夏の昼夜寒暖差10℃前後が果実の糖度・色づきを高める。

主要作物

栗・シャインマスカット・ナガノパープル・サンふじりんご・もも・なし・米。果樹の総合産地

アクセス

首都圏から160km。東京→長野（新幹線1.5h）→長野電鉄orバスで30分。



■ 農家・地域が仕掛けている取り組み

六次産業化への取り組み

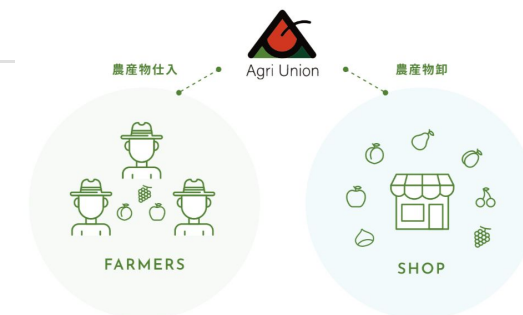
小布施堂（栗菓子・モンブラン）を筆頭に栗の加工による付加価値向上。

町並みもあわせて観光体験にまで昇華をしている。



農家さんとの関係を重視した中規模物流への挑戦

農家約60名が参加する生産者団体。栗・りんご・ぶどう・もも等多品種。



HUBが橋渡しする、企業×地域の共創実績

直近の事例：ソニーグループとの越境プロジェクト（2026年2～4月）

SONY

例：株式会社小布施堂

テーマ：栗農家の高齢化問題をどう解決するか？

経営者：金石健太さん（小布施堂 常務取締役）

課題の背景

栗菓子の原材料となる栗の多くは町内の契約農家に頼っている状況。農家は70～90代が中心で、供給網が崩れるリスクが迫っていた。

アウトプット：「栗の木オーナー制度」＋「生産過程のエンタメ化」

農作業という「労働」を「体験」に再定義。リタイア層・移住者・副業農を呼び込む体験型イベント＆コミュニティを構想。オンラインでもつながれるプロト「実りクエスト」（育成アプリ×リアル体験）を作成・検証。

株式会社小布施堂



創業明治中期～後期の老舗・和菓子店。小布施町にある本店をはじめ、関東や関西圏など全国に販売店と取扱店がある。栗鹿ノ子や栗羊羹は、全国に根づいた人気のいる人気商品。メインの栗菓子の製造販売に加えて、レストランや宿泊施設の運営もおこなっている。

▼剪定に熱中する参加者



▼プロトタイプ：「実りクエスト」（リアル×バーチャル育成アプリ）



お試しプロトによるデモ「実りクエスト」

My栗の木画面

自分の栗の木が日々育っていく様子をバーチャルで確認。現在の小布施の天気や栗の生育状況と連動しており、離れていても現地の空気感を感じる。

実作業に合わせたミニゲーム

実際の作業時期に合わせてミニゲーム形式で作業内容についてシミュレーションし、栗の木への効果について知ることができる。

参加者同士の繋がりが

他の参加者とゆるく繋がる機能としてランキングや装備比較などの機能を盛り込む。他の参加者と自分の状況を比較することで、モチベーションをお互いに高め合う効果を期待。



HUBの役割：農業文脈でのテーマ設定 / 経営者マッチング / プログラム設計（キックオフ→課題提案→プロト→最終報告） / 現地伴走

HUBが橋渡しする、企業×地域の共創実績

接触の場を作るだけでなく、プロジェクトが動き続ける環境を整える組織

大人の小布施留学（2026年度実施中）

20～29歳の都市圏在住若者向け地域就労体験プログラム。農業・栗菓子製造・宿泊施設運営等に従事。



ミライ構想カレッジ in 小布施 NTT東日本 × 東京大学 × 小布施町

2024年産学官三者連携協定を締結。
2050年のミライを構想し、実証を行う
プログラム。

HUBはプロジェクトマネジメント、
フィールドコーディネーターを担う。



Co-Innovation University (CoIU) 実践フィールド（2026年4月開学）

産学連携プロジェクトの実践フィールド
の一つとして小布施を位置づけ。



Co-Innovation
University

長野県、小布施町の人が行き交う拠点『往来』

宿泊・飲食・ワーキングスペースを併設
した複合施設『往来／ourai』を2026年4
月にオープン。



小布施 × 小布施まちイノベーションHUBが生む3つの提供価値

① 地域の文脈と接続するテーマ設定

地域の現場×大企業の接点構築

小布施の歴史・文化や住民の営みといった「地域の文脈」を紐解き、大企業の課題感やパーパスと重なるテーマを設計します。

都市部企業での事業構築経験と、小布施町の行政や地域企業との関係性を活かし、地域と都市部企業の双方にとって意味のある共通の文脈を設定することが可能です。

② リアルなフィールドでの実証実験

肌感覚で感じられる農村 × リアルな経営者 × 機動力

人口1万人・面積19km²というコンパクトな町だからこそ、手触り感のある実証実験が可能です。

地場の農家や経営者、行政の意思決定者と直接対話し、小回りの利く機動力を活かしてプロトタイピングから検証まで伴走します。

③ 人材育成のプログラム設計

地域の経営者の「本気」と 向き合う越境学習

都市部大企業の人材が地域の現場に飛び込み、当事者として課題解決に挑む越境学習の機会を設計します。

地域の経営者が向き合う課題に共に取り組みぶつかり合う体験を通じ、自社事業や自身の役割を再定義し次世代リーダー育成に取組みます。

**まちづくりであり、事業開発であり、越境学習。
これらが一体で進むのが小布施×HUBのコーディネートの特徴です。**

農業の3つの構造課題と4つの関わりしろ

■ 3つの構造課題

1

農産物の販売力

農家単体では大口流通・EC・ブランド化が困難。直販・農協頼みで付加価値が出しにくい。粟以外のブランド化が難しい。

2

農繁期の人手不足

8～11月の収穫期に労働力が不足。季節労働者等への依存が高い。

3

担い手の世代交代

農家の高齢化とともに後継者不在の農地が増加。農地が細分化されており集約が難しい。

■ 企業との連携可能性（例）

① 販路・流通支援

EC・大口流通・バイヤー紹介・商品開発

活きる強み：全国ネットワーク・マーケティング・食品流通

③ 人材・担い手

農繁期人員派遣・新規就農支援・副業農業モデル

活きる強み：人材ネットワーク・研修プログラム設計

② 農業技術・DX

スマート農業・センサー・データ活用・省力化

活きる強み：IT・センシング・機械・ロボティクス

④ 農産品 × 事業連携

加工品開発・ブランドコラボ・観光農園設計

活きる強み：商品開発力・ブランド・原料調達ルート

江戸時代から「協働と交流」を通じて発展してきた小布施を舞台に
【農村×企業】で新たな共創を！